

〈特集〉 深化、そして未来へ

集団と個の両輪へ 新しい歴史の始まり

ビッグワッフルの誕生は

予防医学協会の転換点になった。

それまでの集団を対象とした健診に加え

個人をも対象とした健診へ。

このビッグワッフルを起点に

新しい試みが次々に生まれていった。

〈特集〉 深化、そして未来へ

〈特集〉 深化、そして未来へ



個人に焦点を当てた健診 新しい健診を切り拓くために

2011年から2020年の10年間は、予防医学協会にとって大きな転換期だった。そしてそれは考え方の転換と呼べるものだ。歴史を振り返れば、協会の健診の多くは、学校、地域住民、事業所を対象とした集団健診が中心。岩手県内を検診車で回り、企業、学校などを訪問して健診を行っていた。事業は順調に拡大し、健診検査件数は年間100万件を超えていた。しかし少子高齢化社会を迎え、健診数の減少は確実であった。人が減れば、健診数も減る。この問題を前に

した常務理事・十和田紳一（当時）は、これまでの集団健診だけでなく、個人への新たなアプローチ方法を探り、健診の質を高めることが必要と感じる。この新たな事業をという構想は進んでいたが、そこで懸案となったのが施設の問題である。当時の協会はJA岩手県厚生連所有の施設に間借りしている状況であり、改築や増築には許可が必要であった。さらに旧施設開業当初は120人だった職員は500人を超えるほどに膨れ上がっていた。ただでさえ手狭な環境であり、個人を対象とし



た新しい健診を行うことはそもそも難しい。そこで新施設建設の構想へつながっていった。折よく届いた盛岡市からの申し出によって、この計画は急速に進行していく。盛岡市は盛南開発に伴う人口増加により、当初二つの小学校建設を予定していたが、向中野小学校のみの建設で十分という方針が打ち出されたことにより空いた建設予定地を譲渡する必要があった。小学校の建設予定地であったことから、譲渡先としては公益性のある団体が望ましいという理由で協会へ打診があった。十和田は抱いていた構想を実現する大きなチャンスと捉え、購入を検討し理事会に諮るため準備を進めた。しかしそこに東日本大震災が起こる。理事会の予定は3月18日、次年度以降の事業が見通せない状況の中であつたが、今を逃しては機を逸すと判断した十和田は予定通り実施。新規事業と新施設の構想を継続審

議という形ではあつたが、実質許可を得た。そして6月の理事会にて正式に決議され、構想を実行に移し始めた。2012年3月には正式にUR都市再生機構より建設予定地を購入。その後、設計・監理会社を（株）久慈設計に選定し建設工事は大手ゼネコン（株）大林組と地元事業者（株）平野組とのJVに発注することを決定した。2012年11月27日に起工式を行い、2013年11月末の完成を目指し、建設工事が始まった。その後建設を進めている中で、東日本大震災に端を発する工事需要の増加により、工事に係る人件費や建設資材等の金額高騰などの問題が起きてきた。新施設への投資額は協会にとって大きいものだったが、業績が順調な時だからこそ、あえて挑戦の道を選ぶ。予防医学協会は未来を見据えて大きな冒険へと舵を切ることを決意した。



上：表(南側)、下：裏(北側)。これは建設前の完成イメージイラスト。現在のビッグワッフルの原型と呼べるものである

自

らが携わってきた健診を、さらに「深化」させる。健診して終わりというのではなく、その後のことまで完結させられるようにする。それが健診を事業として行っている協会の責務と位置づけた。ここから生まれたのが精密検査外来である。

それまでの集団を対象としていた健診では、検査を行い、結果を返して終わりであった。しかしその後を追跡すると、要精密検査という結果が放置されている例が少なくないことが分かった。健診のやりっ放しともいえる状況である。放置の理由をたどると、岩手県ならではの問題が浮かんできた。医療機関の偏在や専門医の不足である。

精密検査については盛岡市などの病院で検査を受けることになる。その盛岡においても医療

機関の待ち時間は問題になっており、受ける人にとっても予約、検査、説明と何度も病院に足を運ぶ必要があり、時間も労力も金銭的負担も大きい。遠くから検査に来る人にとってはそれだけで足が遠のいてしまう原因であった。

そこで個人の検査の部分を協会が請け負うことで、多忙を極める病院医師の負担を減らすことにつながる。集団健診よりも高度な検査を行い、その結果に応じた適切な病院に引き継ぎ、治療に当たってもらうということだ。そしてこの役割を果たすために、呼吸器、循環器について新たに医師を招聘。消化器においても既に在職していた医師に対応を依頼した。

もうひとつ、地域医療への貢献も念頭にあった。協会では精度向上を図るため、最新の医療



グランドオープン当日の様子。1,200人超が訪れ、その出発に期待を寄せた

精密検査への取り組み 地域医療への貢献



Big WaffleのMRI検査室。地域医療への貢献として、画像オーダーシステムを構築した

機器を導入していた。これらは高額な機器であり、医療機関によっては設置が負担となるものであった。そこで、協会の機器で検査を代わりに行い、必要であれば読影まで行う「画像検査オーダーシステム」を立ち上げた。新施設はこの拡充を図りながら、さらなる地域貢献を目指すものであった。

建物が完成した後は全職員で引っ越しを行った。しばらくは事務室等の整理に追われたが、最も心配されたのが、移設した検査機器とシステムが問題なく作動するかということである。検査の質を左右するものだけに失敗は許されない中、検査機器については医療技術部長の太田、健診システムについては情報管理課長の山口を中心に準備・確認を行い、入念に試行運転を繰り返した。また、各課担当が集まり、人間ドック、施設

健診フロアでの動線確認や問診票等の動きのシミュレーションを繰り返し行い、2014年1月15日には無事プレオープンすることができた。そして、4月1日からは本稼働を開始。その4日後の4月5日に行ったグランドオープン記念イベントには1,200人超の人々が訪れた。これは想定していた人数を大幅に上回るものであり、県民からの大きな期待を受けた船出だった。岩手県の総合健康支援拠点となるこの施設は「Big Waffle (ビッグワッフル)」と名付けられた。Waffleは、「Wellness and fitness for your fresh life medical examination」の頭文字を取ったものであり、健康を支えていく協会の思いを表す名前となっている。人生100年時代と言われる今、病気の「予防」はさらに重要なものになっていく。その時代にふさわしい施設となった。

受診者ファーストの思想 街に開かれた空間

受

診される方を一番に考えること。そのために新施設は快適さを求めた。これも個への視点であり、健診の質の向上を目指したものである。従来の医療施設を考えれば、そのほとんどが検査や効率を中心に設計されたものとなっており、待合室は決して快適とは言えないものが多かった。新しい施設では外が見えるように待合室を配置。大きな窓からは光がたっぷりと射し込み、天気良ければ岩手山が望める。人間ドックフロアではゆったりとしたソファにマッサージチェアや多数の雑誌を常備、またWi-Fi

を設備するなど、検査の間もリラックスして快適に過ごしてほしいという思いが込められている。さらには使いやすさ、わかりやすいユニバーサルデザインの導入、女性専用フロアの設置、ドックはすべて個室での検査など、細部まで受診者ファーストを徹底した。

快適さだけでなく、検査の内容にもこだわった。人間ドックにおいては、これまでの全員が同一コースというものに代わり、ベーシック、スタンダード、プレミアム の3つの基本コースを新たに設定。ここに、女性の検診やそれぞれのニーズに応じた

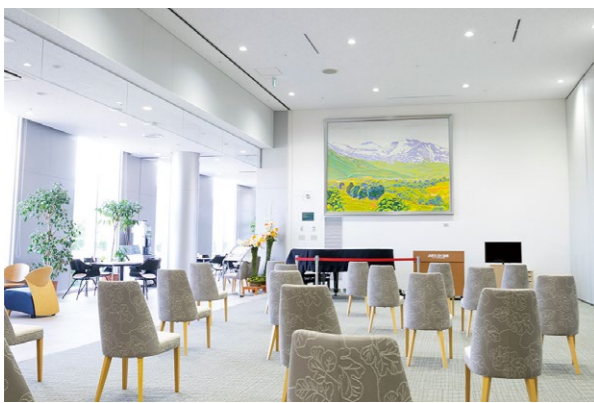
豊富なオプションを組み合わせ、てつくる「オーダーメイド」なトックとした。

そしてビッグワッフルは健康診断を受けるだけの場所ではない。地域に開かれた空間であり、個々の健康をトータルに支えてゆく施設を目指すという思いもある。

施設1階には絵画や彫刻を展示するギャラリーホールを設置

し、県内の画家や学生による展覧会を常時開催している。職員による楽器の生演奏が定期的に行われ、訪れる人の心を和ませている。2016年には盛岡市出身の画家で「山の画家」とも称される吉田清志氏のご遺族より絵画の寄贈を受け、11点をビッグワッフルに、2点を県南センターに展示した。

同じく1階には、会員の健康



1階ギャラリーには吉田清志氏の大作を常設。またピアノ演奏のほか、会議室としても使用できる



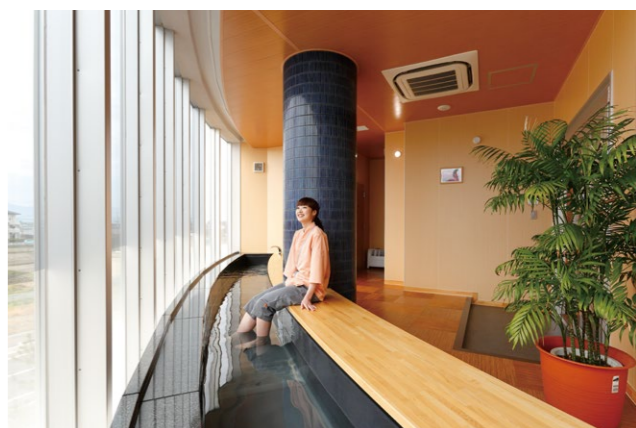
ドック専用食堂からは岩手山を望める



人間ドック待合室はゆったりと伸びやかな空間



左：1階ロビー 右上：女性専用健診フロア 右下：ドック専用足湯





手軽に運動を楽しめるよう気楽良も移設



直営レストランでは人間ドックの食事とランチを調理、提供している

をトータルにサポートする「健康げんき倶楽部 気楽良」を旧施設から移設。様々なトレーニング機器はもちろん、新たにウォーキング専用プールを設置した。ビッグワッフル開設に合わせて「ヘルシーレストラン 食楽良」もスタートさせた。管理栄養士がバランスの摂れた食事を提供し、生活習慣改善を提案している。これら2つの施設は健康診断を受ける人だけでなく、誰でも使えるものである。ギャラリーと合わせて、協会を地域の方々にも活用してもらうことを意図したものだ。

グランドオープン以降も協会を知ってもらうためのイベントを継続すべく、また「街に開かれた空間」というコンセプトを活かすべく、「よぼういがく協会健康フェスタ」を2015年から開始した。施設開放はもちろん、自分の健康について興味・

関心を持ってもらうことも目的とした。開催の半年前から全職種の代表による実行委員会を組織し、健康のことはもちろん、イベントとしても楽しいものにするべく、それぞれの立場から趣向を凝らした企画を練った。イベント当日の10月3日は職員さんさ踊りで幕を開け、さまざまな検査の体験や、普段は見ることのできない検体処理やバックヤードを巡るツアー、健康相談や健康ミニ講話など協会ならではの催し物が行われた。子ども向けにもキャラクター・ガンライザーの握手会や「検診車に絵を描こう」というイベント、バルーンアート、日野自動車からミニカー提供をいただいたパークラフトで検診車を作る抽選会など多種多様なアトラクションを用意した。さらには講演として、元県立中央病院院長の樋口絃先生をお招きし、「あなたを守る

りたい 家族を守りたい」姫神山の脳外科医が語る脳卒中ワースト1からの脱却」と題したお話をいただき、初めてのイベントに花を添えていただいた。

その後、開催ごとに来場者は増え続け、2019年の第5回健康フェスタでは2069人の方にご来場いただき、協会の恒例イベントとして定着した。ビッグワッフルは開設当初のキーコンセプトである「街に開かれた空間」にふさわしく、そして「個」の健康づくりを総合的に支援する施設として毎年多くの人が訪れる場所へととなった。

その後は隣接する建物として、2015年に幼児・児童の健全な育成と高齢者の健康寿命の延伸を目的にした幼老統合施設「Cocca（ココア）」、2018年には精密検査外来の「ふわり」がオープンした。



「よぼういがく協会健康フェスタ」の様子。地域の人と触れ合える貴重な機会となっている

子どもと高齢者が 交流を深め、つながる

「Cocoa」は、今の日本が抱える問題から生まれた。

それは少子高齢化。

安心して子どもを育てられる社会、

孤独を感じることなく年を重ねられる社会。

その一助になるための施設である。



Cocoa（ココア）誕生の経緯は日本社会が抱える問題と大きく関係している。ひとつは子どもを持つ女性の労働環境が十分に整備されていないことだ。保育園が満員で入れなかったり、希望する園に入れないという待機児童問題に加え、小学生となった子どもを預ける施設、いわゆる学童や児童クラブはさらに少なく、潜在的な待機児童の存在が指摘されていた。この解決として保育事業の立ち上げを協会は検討していた。もうひとつは高齢化である。東北地方は急速に高齢化が進んでいる。それに比例するように、高齢者の一人暮らしやそれに伴う孤独死、自死等の問題が増加してきている。さらに北東北の自死率は全国的に見ても高いものとなっている。要介護・要支援とされた比較的健康の高齢者を対象とし、元気に

自立した生活ができるよう予防重視型の介護事業（デイサービス）も必要と考えていた。さらに協会の理念は「健康と福祉に寄与する」ことである。これまでは健康への取り組みに重きが置かれていたが、福祉面でも協会が果たすべき役割があると考えた。社会や地域への貢献、平たく言えば支えられてきたことへの恩返しである。開設に向けて当時県南センター

長の折坂を中心に、先進施設の視察や情報収集を進め、建物のデザインや体制の検討を進めた。そうして平成27年4月、保育事業と介護事業を統合した取り組みとして「幼老統合事業」をスタートさせた。「Cocoa（ココア）」では、幼児・児童と高齢者が日常的に交流を図ることで、幼児・児童にとっては心身の健全な育成に、高齢者にとってはメンタルヘルス、生きがい等を含

めた健康の保持増進が図られることで生活の質を高め、健康寿命延伸につながることを目的としている。「Cocoa（ココア）」は「Community of children & older ages」の単語の頭文字を抜き取り再構成した名前。異世代間の交流がここで生まれており、新しいコミュニティが形成されつつある。



精密検査外来



検診をより快適に その理想に向かって進む

「ふわり」のエントランスの先には、和の落ち着きを取り入れた空間が広がる。大きな窓の外には、美しい庭園が広がり、やさしい水の音が聞こえる。検診というものを突き詰めた先にある理想がここに表現されている。



公益財団法人岩手県予防医学協会
精密検査外来施設 ふわり



「ふわり」は精密検査外来に位置づけられる施設。

診察室と最新の機器を備えた検査室を設ける「精密検査外来フロア」をはじめ、「ストレッチェック面談室」、「特定保健指導相談室」など充実した内容になっており、さらにはゆつたりと落ち着いて過ごせる空間づくりがなされている。これは建物全体のデザインを見れば一目瞭然。精密検査に訪れる人の緊張感をやわらげ、さらには安らげることを目指した。落ち着いた空間とはどんなものだろうという議論を重ねた結果、古民家風のデザインが採用されている。エントランスから続くホールは、伸びやかに広がり、どこか懐かしさを感じさせてくれる。また

使用されている木材にも吟味を重ねており、重厚感、高級感も併せ持つものに仕上がった。大きく取られた窓からは緑美しい庭園を見渡すことができ、安らぎをもたらす演出となっている。

なお、この「ふわり」のシステムは、健康診断で精密検査等が必要とされた方に専門医がより詳細な検査を実施し、治療等の必要があるかどうかを絞り込み、その必要が認められれば、かかりつけ医や専門医療機関に紹介するというものだ。このシステムを実現するためには、受け入れ先病院との連携も重要。企画管理部長（当時）の米澤が各郡市医師会の会長や事務局を訪ねて回り、設立の趣旨の説明と協力依頼を行い、さらには多

くの方に知っていただけるように広報等を活用し、PR活動も十分に行った。高い診断精度が求められることから、立ち上げに当たっては、県立中央病院総括副院長の呼吸器内科部長であった呼吸器専門医武内健一医師と元県立中央病院副院長で宮古病院理事であった循環器専門医の田巻健治医師を招聘。経験豊富な専門医と熟練スタッフのチームワークにより、当初より目指してきた素早く精度の高い検査ができる体制が整った。

精密検査が必要と言われながら、長い待ち時間や混雑を嫌がり、受診を避けるという人は少なくないだけに、「ふわり」では完全予約制とし、ほとんど待ち時間がなく受診できるようにし

た。また可能な限り当日中に結果説明を行うようにしている。これにより精密検査の受診率アップにつながる。同時に、中核病院等で働く医師の負担軽減に貢献したいと考えている。

「予防に勝る治療なし」という創立者の理念はそのまま受け継がれている。ただそこに留まるのではなく、協会は時代に合わせた予防のあり方を考え、より幅広いサービスの提供ができる体制を整えてきた。検査だけに終わるのではなく、その先へつないでいくこと。集団健診への力量は減らさず、さらに個への視座を持ち、事業を拡大させていく。予防医学協会の果たすべき役割はさらに広がり続けている。

50

周年という節目の年に、私たちは次の時代を考へる。健康志向はこれからさらに高まってゆく。社会は間違いなく大きく変わる。その中で予防医学協会はどのように役割を果たしてゆくか。

半世紀前、健康診断はまだ黎明期であった。協会は、充実した健診の提供や検査自動化の推進、機器導入、職員教育とその時代を先駆けていった。日々を積み重ね、一年、十年、そうして50年が過ぎた。ひとつの通過点を迎えた。

次の50年を考えたとき、健康

診断は様変わりしているだろう。科学技術の進展は目覚ましく、次々と新たな検査や機器が登場してくるはずだ。人間は年を重ねるとつい「昔は」と言い、新しい物事を疎んじてしまうが、組織は常に代謝を続けなければならぬ。情報を集めることはもちろん、それを自らのものとして取り込み、そして正しく発信し社会に還元しなければならぬ。ニーズに応えるだけでは後塵を拝す。新たな価値を創造しなければならぬ。

次の50年を見据えて

そのために必要なのは創造力だ。そして想像力。何が求められるのか、これからの時代はどうなるのか。集めた情報からさらに先へと進む力だ。実務をしっかりと行える人を育てるだけでは不足する時代が来る。新しい時代を創り出す人材を育てることが必要となろう。

組織にも変革が必要だ。50歳を過ぎ、組織が大きくなると縦割り、肥大化、硬直化が進んでゆく。世代交代が進み、理念が失われていけば統制の危機となる。その先を見据えるならば、

柔軟性を取り戻すための施策が

求められる。個の多様性を尊重し、意見や提案を闊達に議論できる場を創造する。先に進むとうとする人を阻まず、組織を広げてゆく。社会の大きな変容に合わせて、その先を行く。しかし大きな針路だけは確かに抱いてゆく。今日もまた、あおぎり号が県内を駆けてゆく。その日々を重ね、大きなものを目指す。「岩手県民の健康と福祉に寄与する」ため、すなわち県民の幸福のために私たちはあるということを中心に刻んでゆく。

